

勤務医部会だより

6年間に及ぶScrap and Build方式での 病院全面改築を経験して



幹事 奥村明彦
(海南病院副院長)

当院では平成23年2月から現有敷地内において、Scrap and Build方式による病院の全面改築工事が進行しています。Scrap and Build方式とは、空いているスペースに新しい建造物を建て、そこへ部分的に引っ越しを行い、引っ越し後の空になった建造物を取り壊してそこに新たなスペースを造る、ということを繰り返す工事の方法です。6年以上におよぶ長い工事でしたが、平成28年11月によりやく全面竣工を迎えることとなりました。

病院改築において基本となったコンセプトは、“高機能でコンパクトな次世代型病院”です。院内では建築委員会が組織され、職員の意見を反映させながら設計、工事が進行していきました。新築される建物は、既存の建造物と同等の延べ床面積と決まっていたので、すべての人の要望に添うことは物理的に不可能です。場合によっては同じ空間を時間によって違う用途で使用するという、いわば4次元的な考えも取り入れながら、少ないスペースを如何に有効に利用するかということを議論しました。そして集約された意見を可能な限り図面に反映させました。

基本コンセプトに基づいた設計段階で、最も重要視されたことは、患者さんと職員の動線でした。多くの患者さんが利用する採血室や放射線検査等の検査室については、外来や病棟から最短の移動距離でアクセスできるよう配置を考えました。新しい診療棟の1階中央部分には、救命救急センター（ER）が配置されています。ERからCT室、放射線検査室へは扉1枚でつながっており、直通のエレベータで2階の救急病棟へ患者さんを搬送できるようになっています。新しい診療棟がオープンしてまもなくの平成25年9月1日には、愛知県下では19番目となる“救命救急センター”の指定を受けました。

改築工事の最後に完成したのは、コンビニエンス

ストア、レストラン、医局、図書室、会議室、講堂を備えた教育診療棟でした。これまでは主として診療機能に関連した部分の改築工事でしたが、新しい教育診療棟は、職員のための建物です。教育診療棟のオープンにより職員はこれまでの“我慢の時代”から解放されました。多くの制限の中で“誰もが満足”とは言えないかもしれませんが、“誰もが納得”できる病院になったのではないのでしょうか。

Scrap and Build方式による改築工事でも最も苦勞した部分は、“引っ越し”が多いことです。まず仮設場所へ、次に本設場所への引っ越しがあるので、最低2回は引っ越しがあります。今回の工事期間中に、一部の外来診察室や医局は3回以上の引っ越しを余儀なくされました。外来部分の引っ越しはとくに変でした。仮設場所とはいえ、普段通り多くの患者さんが来られ、これまで通りの診療ができなくてはいけません。患者さんの待合場所、動線を考えて何度もシミュレーションを繰り返しました。そして患者さんと職員へ周到に周知を行い、混乱を最小限にするために多くの案内人を配置して対応するなど、様々なことを細部にわたり詳細に検討する必要がありました。事務方の多大な努力がなければできなかったことだと思います。

病院職員が一丸となり、また、患者さんからも暖かいご理解をいただきながら、この長いトンネルを抜け出すことができたことに、関係各位への深い感謝の念とともにある種の感動を覚えます。工事の最後には、病院全体が見渡せる敷地の一角に、寄贈いただいた由緒ある“ヒポクラテスの樹”が植えられます。全面竣工を迎える頃には、新しく生まれ変わった病院を静かに、そして暖かく見守ってくれていると思います。

